

幼稚園での英語活動の試みによる園児の学びと教員の学び

保護者と教員への調査に基づいて

寺尾 裕子 鈴木 正敏 名須川 知子
(兵庫教育大学大学院)
高橋 美由紀
(愛知教育大学)

平成17年9月から平成18年3月の間に、計6回の英語活動がH附属幼稚園で実施され、その活動の詳細は寺尾他(2007)で報告されている。本稿においては、幼稚園での英語活動の試みによる園児の学びと幼稚園教員自身の学びについて、保護者へのアンケート調査および教員へのインタビュー調査に基づいて明らかにし、幼稚園における英語活動の意味を再確認することを目的とする。

保護者から見た園児の学びを調査するために、平成18年2月27日～3月3日に質問紙によるアンケートが実施され、46名中の33名から回答を得た。教員自身の学び及び教員から見た園児の学びについて明らかにする目的で、平成18年3月20日と29日に当該の教員へのインタビュー調査が実施された。両調査の結果から、以下のことが言える。

園児は英語に興味を持つようになり、アルファベット表記された自分の名前を認識できるようになった。日常生活において、英語で簡単な挨拶をしたり、習った物などの名前を英語で言えるようになった。英語の歌を口ずさんだり歌うようになった。さらに、幼稚園での英語活動に対する1名の教員の考えが、「それは、良いこと、必要なこと」という肯定的なものに変化した。また、2名とも保育内容が広がることを学んでいる。

園児と保護者にとっての幼稚園で英語活動を実践する意味は、園児が慣れ親しんだクラスで皆と一緒に楽しく触れる体験をすることができること 保護者が自らの子供と同じクラスの子供と一緒に英語活動を経験できるのが良いとしていること 自然にアルファベットに興味を持たせることができること 将来小学校で英語に触れる機会が来たときに、「英語活動は楽しい」という気持ちで取り組めることが挙げられる。

キーワード：附属幼稚園、幼稚園での英語活動、英語の歌、保育内容

寺尾 裕子：兵庫教育大学大学院・社会・言語教育学系・准教授。〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: uko@hyogo-u.ac.jp

鈴木 正敏：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・准教授。〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: suzukimj@hyogo-u.ac.jp

名須川知子：兵庫教育大学大学院・幼年教育学系・教授。〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: nasukawa@hyogo-u.ac.jp

高橋美由紀：愛知教育大学・教育学部・人文社会系・外国語教育講座・教授。〒448-8542愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1, E-mail: miyukit@aecc.aichi-edu.ac.jp

What Children and Teachers Learned through English Activity Lessons in a Kindergarten Class: Based on the Questionnaire Survey toward Parents and Interview to Teachers

Yuko Terao , Masatoshi Suzuki , and Tomoko Nasukawa

(Graduate School of Hyogo University of Teacher Education)

Miyuki Takahashi

(Aichi University of Education)

During the 2005 academic year, five years old kindergarten children at the attached kindergarten class to Hyogo University of Teacher Education participated in six English activity lessons. Terao, et. al (2007) describes the English activity lessons in detail.

The purpose of this paper is to clarify what kindergarten children and their two teachers had learned from the English activity lessons and the meaning of 'giving an English activity lesson in a kindergarten class'. An 11 question survey was given to 46 caretakers from February 27, 2006 to March 3, 2006, and 33 surveys were returned. Terao, Y., the first author of this paper, interviewed the two kindergarten teachers who participated in the English activity lessons. The interviews took place on March 20, 2006 and March 29, 2006.

The results of the survey suggest that kindergarten children can (1) sustain an interest in English and recognize their own names written in English alphabet, (2) make simple greetings in English and tell what they have learned in English activity class, and (3) sing or hum an English song. In addition, (4) one of the two kindergarten teacher's belief had changed to an "English activity lesson in kindergarten is good and necessary" and (5) both of the kindergarten teachers had learned that it is helpful to expand the contents of the activities in child care.

As a result of the English activity lessons in the kindergarten class, which is based on the 11 item questionnaire survey, the children and their parents benefitted from the lessons in the following ways: children had an enjoyable time through the English activity lessons, (2) parent of the children expressed that they would like their children to experience English activity lessons with their classmates, (3) children had an interest in English alphabets and began learning some of the alphabets on their own initiative, and (4) children may continue to enjoy English activity lesson in elementary school.

Key Words: Attached kindergarten, English activity at Kindergarten, English songs, Contents of child care

Yuko Terao: Associate Professor, Social Science and Language Teaching, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: uko@hyogo-u.ac.jp

Masatoshi Suzuki: Associate Professor, Foundations of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: suzukimy@hyogo-u.ac.jp

Tomoko Nasukawa: Professor, Foundations of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: nasukawa@hyogo-u.ac.jp

Miyuki Takahashi: Professor, Aichi University of Education, Hirosawa 1, Igadani-machi, Kariya-city, Aichi 448-8542 Japan, E-mail: miukit@aeu.ac.jp

はじめに

平成21年4月から改訂された学習指導要領によると、小学校の第5学年から週1コマ程度の英語活動の実施が計画されている。内容としては、「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること」、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、言葉の面白さや豊かさに気づくこと」などが書かれている。世界の中の日本であることが前提であるので、英語を代表とする、いわゆる外国語を学ぶことが生徒の生きる力を育むためにも必要な時代であることが認識される。

また、文部科学省による平成21年度学校基本調査速報の「調査結果の要旨」及び「参考図表」によると、幼稚園の園児数は163万人（前年度より4万4千人減少）で、幼稚園就園率（小学校第1学年児童数に対する幼稚園修了者の数の比率）は56.4%である。H附属幼稚園の園児ではほとんどがH附属小学校に進学することが予測される。なお、H附属小学校では、平成14年度の英語活動の試行に続き、平成15年度からは、第1学年から第6学年まですべての学年の児童を対象とする英語活動を実施してきている。したがって、H附属幼稚園での英語活動の意味を再確認することには、幼小連携の教育という視点からも意味のあることと考える。

1. 保護者の意識と保護者から見た園児の学び

平成15年度以降、附属小学校での英語活動が定着しつつあった折に、附属幼稚園の保護者から、幼稚園でも英語に触れる機会を望む声があがってきたため、学校教育研究センター・学校問題解決研究部門では、平成17年度からのプロジェクト研究課題を「学校におけるコミュニケーション能力の向上に関する総合的研究」と決め、そのもとでの3つのプロジェクトの1つとして「幼稚園・小学校英語教育に関する研究」を立ち上げた。そうして、平成17年度に、「幼稚園での英語活動」の実践・研究に従事した。小学校と幼稚園に同時に児童、園児を通わせている保護者の方もあり、当時の幼稚園長が、幼稚園での英語活動の実施を望む保護者の声をいち早く取り上げられたので、筆者らの英語活動実践と研究が実現したと言える。なお、平成17年7月から平成18年3月の間にH附属幼稚園で実践された計6回の英語活動についての詳細は、寺尾裕子・鈴木正敏・高橋美由紀・名須川知子・谷石宏子(2007)で報告されている。

英語活動に対する保護者の意識及び園児が英語活動にどのように取り組み、どのような学びをなし得たのかを保護者の視点から明らかにするために、質問紙によるアンケート調査をすみれ組とわかば組（平成17年度当時）の保護者46名に実施をし、33名の母親から回答を得た。なお、質問紙は、プロジェクト・メンバーが作成、確認

をしたものである。実施期間は、平成18年2月27日から3月3日の間である。質問紙は11の設問から成り立っている。選択肢から選ぶものが4問、選択肢から選んだ後に、記述式で答えるものが6問、そして自由記述式のもの1問の全11問である。詳細は、付録Aを参照のこと。

1.1 アンケート調査結果と分析

回答者は、全員が母親であった。また、回答率は71.7%である。男女の比率は、男児が16名、女児が15名、及び無回答が2名である。幼稚園での英語活動前の英語の学習歴については、学習歴ありが15名、学習歴なしが16名、無回答が2名である。設問3から設問10までに対する回答結果を表1にまとめた。以下にその内容について述べる。

設問3では、園児の英語学習経験の有無等を尋ねた。調査結果から、園児の英語学習体験には差がないと言える。無回答のうち1名の母親は「学ぶという程ではないが、触れる程度家庭で」と記述しており、「ある」「なし」どちらを選ぶのかの回答に迷ったため、どちらも選ばなかったと考えられる。無回答であった、もう1名の母親は、「特定の教育機関の英語講座に週1回通っている」と記述している。また、「ない」と回答した1名は、自宅で「自らが英語の歌をよく歌ってあげたり、テープなどを聞かせたり、見せたりしていました」と記述している。

設問の日本語が、これまでの経験を尋ねるものとなっており、調査時点での園外での英語学習の有無については尋ねていないが、回答記述から、調査時点において園外で英語を習っている園児であるとはっきり確認できたのは、「ある」と回答した16名中の5名と無回答のうち1名の計6名である。また、「ある」の回答中には、「パソコンで一人で一生懸命に話しながら」という記述があり、学ぶ方法にも新たなツールが取り入れられていることがわかる。

設問4では、保護者自身の「英語教育」に対する興味程度を尋ねた。33名中29名が「英語教育」への興味を示している。設問3からも2歳、3歳から英語教室へ子どもを通わせた母親の存在が明らかになったが、そのような行為は保護者の「英語教育」への強い興味の現れからであろう。

設問5では、幼稚園での英語活動実施についての賛否とその理由を尋ねた。調査結果から、すべての保護者が「賛成」あるいは、「やや賛成」を選んでおり、反対の者はないことがわかった。33名中28名から「賛成」、もしくは「やや賛成」の理由が述べられた。複数の理由を述べているものもある。その記述をKJ法により分類し、まとめると、理由として以下のことが浮かび上がって

表1：質問紙調査結果（設問3～設問10）

設問3：お子様は、今までに英語を学んだことはありますか？ あるとしたら、具体的に、どこで、どのような様子であったかをご記入ください。				
ある	ない	無回答		
16	15	2		
設問4：保護者の方は子どもの「英語教育」に興味がありますか？				
非常にある	ある	どちらともいえない	あまりない	まったくない
12	17	3	1	0
設問5：幼稚園で英語活動を行うことに賛成ですか、反対ですか？ また、その理由を聞かせてください。				
賛成	やや賛成	どちらともいえない	やや反対	反対
31	2	0	0	0
設問6：お子様は英語に興味があると思いますか？				
非常にある	ある	どちらともいえない	あまりない	全くない
7	20	5	1	0
設問7：幼稚園で英語活動を実施してから、お子様の英語に対する様子は変わりましたか？ どのように変わりましたか？				
非常に変わった	変わった	どちらともいえない	あまり変わらない	以前と同じ
1	16	9	4	3
設問8：お子様は幼稚園の英語活動について、保護者の方にどのように話していますか？ また、お子様の話す内容を聞かせてください。				
英語が大好き	好き	どちらでもない	嫌い	英語が大嫌い
8	17	8	0	0
設問9：お子様は家庭で英語を使って話すことがありますか？ またあるとしたら、それはどんな時に、どのような様子ですか？				
非常にある	ある	どちらともいえない	あまりない	全くない
0	16	5	7	5
設問10：お子様は家庭で英語の歌を歌うことがありますか？ またあるとしたら、それはどんな時に、どんな歌ですか？				
非常にある	ある	どちらともいえない	あまりない	全くない
8	18	4	1	2

る。なお、()内の数字は、回答件数である。

親としていろいろな体験をさせたいと考えるが、「英語活動」もその一つである(1)。日本の環境では日常的に英語が自然と耳に入る環境ではないので、子どもにとって日常生活の場である幼稚園で「英語活動」があると、自然に英語に触れられる。自然に英語に触れられるのは良いことである(6)。さらに、園では友達と一緒に楽しんで英語に触れることができる(6)。英語に触れることは、地域に外国人が増えたことも含め現代のニーズに合ったものである(6)。年齢の低いときから英語

に触れることは英語の習得の点でも良いことである(8)。

実際、子どもに良い発音が身に付いたり、自分から進んで言葉が言えるようになったことを評価している(3)。

設問6では、園児の英語への興味について尋ねた。33名中27名の保護者が、自らの子どもが英語に興味を持っていると回答している。

設問7では、幼稚園での英語活動の園児への影響を尋ねた。英語活動実施によって、子どもが「非常に変わった」もしくは「変わった」と考えている保護者は33名

中計17名、「どちらともいえない」と考えている保護者は9名、「あまり変わらない」、「以前と同じ」と考えている保護者はそれぞれ4名と3名である。どのような変化があったかについては、16名から回答があった。複数の変化が書かれているものもあるが、保護者から見た園児の変化をまとめると、以下の通りである。なお、()内の数字は、回答件数である

- ・英語の歌を歌うようになった、あるいは口ずさむようになった(6)。

- ・以前は恥ずかしがったりしていたのに、口から英語を出すようになった(3)。

- ・英語の絵本を借りたり、英語の本、英語教材を自ら見るようになった(3)。

- ・英語に興味を持つようになった(2)。

- ・妹に「は何というか知ってる?と聞いたりしている(1)。

- ・家でよく英会話をしている(1)。

- ・日本語以外の言語があることを知った(1)。

設問8では、園児の英語についての好嫌について等尋ねた。調査結果から、「嫌い」、「英語が大嫌い」という園児が存在しないことがわかった。英語嫌いを作ってはならないと考えて、幼稚園で「英語活動」を実践した筆者らにとって好ましい回答であることを添えておく。園児の話す内容は、以下の通りである。

「英語活動」の前日に、「明日英語の先生が来る。」と楽しみにしていることを表現する。また、「英語活動」のあった当日には、「今日先生が来てこんなことをして、楽しかった」「今日はこんな遊びをしたよ」「今日英語があったよ」「知っている歌を習ったよ」「歌を歌ったり楽しい」など保護者に言うのみならず、習った歌を歌ったり、教えてもらった英語(単語、会話文)を話す園児がいることがわかった。

英語学習歴のない園児で、「ちゃんの名前とちゃんの名前は1文字ちがいだね」と言ったとの回答があったが、ローマ字表記の園児の名前を観察し表記の違いを発見して学んでいることが判明したと言える。

設問9では、家庭での園児の英語使用の有無と使用場面等について尋ねた。「非常にある」は、0名、「ある」は16名である。また、「ある」と答えた16名中の15名、「どちらともいえない」と答えた5名中の2名、「あまりない」と答えた7名中の3名の計21名が、園児が英語を話す時、場面、様子について回答をしている。なお、()内の数字は、回答件数である。

「あいさつ」場面という回答が複数(4)あるが、「周りの大人に対してのあいさつ/迎える時幼稚園で他の母親に(1)。」という回答があることから、家庭内だけでなく、実際の場面での英語の使用もあることが判明したと言える。「数を数える時(3)」に英語が出てくること、「野菜、

動物を目にすると」英語の単語を口にすること(5)、「家族からの英語での話しかけ」に対しても英語で返事をする園児も複数見られる(3)。その他、回答から、「英語のDVDを見た後(1)」、「お風呂の中(1)」、「兄弟で遊んでいるとき(1)」、「一人遊びのとき(1)」にも英語が口から出てきていることがわかった。「朝、空を見て(1)」という回答もあったが、そのときにどのような英語が話されるのかは記述されていない。

保護者が、「園児が英語を話すことはあまりない」と考えている場合でも、「妹との“ゴッコあそび”で、“ウソッコ英語会話”をしている(1)」、「テレビで英語単語が出てくる際に、時々口ずさむ(1)」、「数を数える時、色をさして言うときなど(1)」と書いており、「どちらともいえない」の回答においても、「数を数える時にワン、ツー、スリーと数えたり、弟に色を英語で教える(1)」、「目につく物の(英)単語を口に出す(1)」とあるので、保護者は自らの期待ほど多くないため「あまりない」「どちらともいえない」を選択したと言えるだろう。

設問10では、家庭で園児が英語の歌を歌うかどうか等を尋ねた。幼稚園での「英語活動」では、英語を使った遊び(歌・ゲーム)を活動の中心として指導案が作成された。したがって、毎回英語の歌を園児は聞き、歌っている。そこで、家庭でも歌っているかどうかを尋ねたところ、「非常にある」が8名、「ある」が18名、という結果であった。

どんな時に、どんな歌を歌うのかについては、「非常にある」と回答した8名中の7名、「ある」と回答した18名中の13名、「どちらともいえない」と回答した4名中の2名、「あまりない」と回答した1名からの記述回答を得た。なお、()内の数字は、回答件数である

英語の歌を歌う場面としては、「車の中(2)」、「お風呂の中(2)」、「(一人)遊び中(2)」、「絵を描いている時(2)」、「気分/機嫌の良い時(2)」、「英語活動のあった日(1)」、「英語のDVDを見たり聞いたりしている時(1)」、「CDに合わせて(1)」、「脈絡なしに(1)」、「ふとした時に(2)」であった。歌われている歌は、「幼稚園でならしたもの」という回答のほか、「英語活動」で導入した歌の題名、もしくは歌詞の一部が記されていた。なお、「英語活動」で導入した英語の歌は、以下の通りである。

- ・Hello Song (revised by Takahashi).
- ・Open Shut Them.
- ・Seven Steps.
- ・Hello, hello, what's your name?
- ・Stand up, one, two, three.
- ・Head, shoulders, knees and toes.
- ・A Song of Animal Talk.
- ・We wish you a Merry X'mas.
- ・Ten Little Boppers.

上記の調査結果から、園児は英語活動時に聞いたり歌ったりした歌を家庭でも歌ったり、口ずさんでいることがわかる。

設問11では、「英語に関して幼稚園へのご意見をお聞かせ下さい」ということで、保護者の幼稚園への要望を自由記述式で尋ねている。33名中の23名から回答（複数回答）を得た。

「英語活動」の実施に感謝している者が2名、「画期的だ」、「効果がある」、「良いことだ」とする者がそれぞれ1名、1名、4名である。また、活動の継続を望む者が2名、活動自体の回数の増加を望む者が7名、さらに他のクラスでの実施（3歳児と4歳児）を望む者が6名あった。また、「幼稚園で歌った英語の歌詞・楽譜を配布してほしい」という具体的な要望の回答が2名あった。

一方、「楽しく外国人と遊べれば十分」、「興味を持って程度の関わりで良い」、「9月からの実施でよい」という意見もそれぞれ1名あった。

1.2 保護者の意識

本アンケート調査に回答を寄せてくれた保護者では、子どもに英語を学ばせていた、あるいは学ばせている者が33名中17名いることが判明した。それに加えて、特定の英語教育機関ではないが、家庭で学ばせていると書いている者が1名いることも判明した。子どもが2歳、3歳のときから英語教室へ通わせている者もあり、英語教育への関心は高いと判断できる。そのことは、英語教育への興味を持つ者が33名中29名と多いこと、及び幼稚園で英語活動を行うことに反対の立場を取る者が全くないことから伺える。

さらに、「英語に関して幼稚園へのご意見をお聞かせください」という設問11への23名の回答記述から見ると、幼稚園で英語活動が実施されたことに感謝し、良いことと評価し、次年度においての継続を望む者がいることがわかる。また、5歳児対象のみならず、3歳児、4歳児への英語活動実践を希望している者も存在する。実践されたのは、毎回20分の全6回の英語活動であったが、回数を増やしてほしいという希望が7名ある。これらのことを考えると、幼稚園で子ども皆が一緒に体験できる英語活動への保護者の期待度が高いことが伺える。

1.3 保護者から見た園児の学び

保護者から見ると、8割以上の子ども達が英語に興味を持っており、英語活動実践後は、英語の歌を歌ったり、口ずさんだりするようになっている。家庭内とは言え、保護者の観察による回答であるので、保護者の知らないところでもっと多く英語の歌を歌ったり、口ずさんでいる可能性がないとも言えない。

家族との会話に、英語活動のことが話題となるだけで

なく、実際に家庭内での英語での会話が父子、母子で行われることもあるし、周りの大人への挨拶に英語を使う子どもも存在する。保護者が自分の子どもは家で英語はあまり話さないと思っている場合でも、保護者の観察によると、実際には子どもは数を数えるときに英語を使ったり、目につく物の名を英語で言ったりしているのである。幼稚園での英語活動場面同様、家庭で遊びの場面で自然に英語が使えるようになっていることがわかる。英語の歌に関して、「子どもが家では全く英語の歌を歌わない」と回答したのは、2名であり、家庭においても英語の歌が自然に口をついて出てくるようになっていることがわかる。

2 幼稚園教員の学びと幼稚園教員から見た園児の学び

幼稚園の教員は、園児の学びについてどのように考えているのだろうか。さらに、英語活動に関わったことによって、教員自身どのような学びをしたのであろうか。英語活動に関わった教員は、考え方、態度などに何らかの変化があったのであろうか。また、あったとすればどのような変化があったのか。

以上の？の疑問を明らかにするために、平成18年3月18日と20日に当該教員2名を対象寺尾が作成した設問に基づき半構造的インタビューを実施した。1名（A氏）は、付属で2年とその他で27年の教歴で、もう1名（B氏）は教員歴が付属での1年とその他で3年であった。

前もって準備をした設問は、合計20問である。第1部は、教員自身に関する12の設問から成り立っている。第2部は、園児に関する5つの設問から成り立っている。第3部は、その他で、3つの設問から成り立っている。あらかじめ、教員2名に許可を得た上でテーブルコーダーにインタビューのやり取りを録音をし、音声データを文字おこした。データ収録時間は、各60分程度である。20の質問は、資料Bを参照のこと。

2.1 インタビュー調査の結果と分析

2.1.1 第1部の調査結果と分析

の中には、各設問に対する答えとなる該当する情報部分を引用して、記述してある。

設問1では、幼稚園での保育に関する信念・信条を尋ねた。A、Bは、2名の教員それぞれを表す。

<p>A: 「子ども主体」の保育ではあるが、「教師の意図も出さないといけない」と考える。</p> <p>B: 子どもが違う方向に行かないよう、教師がしっかりすべきである。子どもの幅を広げてあげるのが教師の役目だ。</p>
--

引用からわかるように、両名とも幼稚園での保育では、教員はしっかりして、子どもを導くことが必要だと考え

ていると言える。

設問2では、英語活動前の英語活動についての考えを尋ねた。

A: 不安もあった、先生が来て教えてくれるので、その補助となればと考えていた。
B: 英語に自信がないので自分たちがどこまでできるか、先生にすがることになるのかなという不安があった。園児は日本語がまだ十分でないと考えていたので、英語活動を入れることに不安があった。

両名とも、英語活動に対する「不安」を持っていた。自分自身の役割に対する不安と、活動それ自体を保育に導入することへの不安である。

設問3では、英語活動実施後の英語活動についての考えを尋ねた。

A: 英語活動はうまく導入された。英語活動のタイミングが良かった。
B: 今は、英語活動を幼稚園ですることは良いこと、必要と思うようになった。(英語の)本を置く、カルタを作る、表を貼るなど英語活動をフォローすべきであった。環境を与えるのは教師の責任。

Aは、英語活動開始前の外国人の幼稚園訪問で園児に英語活動を受け入れる準備ができていたから、英語活動の導入は成功したとみなしている。さらに、自らも英語活動に参加し、子どもとともに新たな体験をしたことで、英語活動が子どもにとって、「楽しみなもの」「不思議な体験」「良い機会」と捉えることができています。

Bは、英語活動開始前は「積極的に薦められない」と考えていたが、やはり実際に英語活動に参加した後は、「英語活動を幼稚園ですることは良いことだ」という新たな考えを持つに至っている。さらに、園児が英語に触れる環境を整えるのは教師の責任であると考え、具体的な環境整備にまで考えが及ぶようになっていく。

設問4では、英語活動前に、英語および英語学習についての特定の考え・信念を持っていたかどうかを尋ねた。

A: 外国語は耳からはいるのが学びやすい。外国語は会話ができるのが良い。
B: 留学が一番。海外旅行など必然の環境なら学べる。

外国語学習者が外国語学習について持つ特定の考え・信念は種々存在する。「言葉は、それが話されている環境で学ぶのが一番である」、だから「留学が一番」という考え・信念は、その一つである。外国語学習に用いる学習方略は個人によって違いがあるという研究もある(Oxford, R., 1990)。このインタビュー調査結果からわかることは、当該教員はそれぞれ外国語学習について、自分自身の特定の考え・信念を持っている、ということである。

設問5では、英語活動開始前の、教員自身の英語に関

する興味・関心について、および英語に関連して行って来たことについて尋ねた。

A: 特になし。
B: 海外旅行に興味がある。小学校の時、英語学校へ行った。小学校6年生のとき、小学校で英語を学んだ経験がある。英語のビデオ、前から聞いていた。

Aでは、特に英語に関することをやっていないということだった。一方、Bは、教員歴もまだ4年で若く、時代の変化であろうが、公立小学校6年在籍時に英語学習の経験をしている。私生活においても英語のビデオが身近にあることがわかる。

設問6では、英語活動開始後の、教員自身の英語に対する興味の変化について尋ねた。

A: 子どもに質問されたら答えたいと思い、『英語の挨拶』の本を10月ごろ買った。世界の国旗を買った。もっと英語を勉強したいと思うようになった。
B: しないといけなと感じた。時間が増えたわけではないが、心構えが変わった。思い込みが良い方に変わった。教師の思い込みで判断してはいけないと思うようになった。

Aでは、英語活動への参加態度が、開始前の「英語活動は補助としてやれば良い」から、日常の保育場面においても子どもから質問を受けることを想定して、『英語の挨拶』の本を買うという積極的な行動をしている。また、英語学習への興味も出てきたことがわかる。

Bでは、引用にあるように、子どもには英語は必要がないとか、英語学習はできないだろうといった教師の思い込みで判断するべきではないと考えるようになっていく。

設問7では、英語活動前と後での保育内容の変化について尋ねた。

A: 活動で行った、英語の歌を毎日歌った。活動で行った手遊びを行った。
B: 振り返りをやった。絵を描く前の段階で、今日はこの色(習ったもの)を出しているよと、英語を入れて言った。手遊びをするときも、英語を使った。私たちの保育内容の幅が広がった。

両名とも、英語活動で行った遊び、歌った英語の歌日常保育の際に取り入れている。Bが言っているように、英語活動を教師が実践することを通して、日常の保育の内容の幅が広がってきているのである。

設問8では、日常の保育での英語の活用の有無について、その理由とともに尋ねた。

A: 英語の歌、たとえばHello Songを毎日歌った。せっかく教えてもらったので子どもに覚えてほしかったから。楽しい歌だと思ったから。
B: 意図的には、やらなかった。自然の流れの中で、すでに行ったことについて、「英語で何と言うんだろうね」と問いかけることはあった。

日常の保育での英語の活用に関しては、2名の教員それぞれの対応が全くことになっており、興味深い。Aは、「せっかく教えてもらったので、子どもに覚えてほしい」と思い、意図的に毎に英語の歌を歌わせていた。一方、Bは、自然の流れの中で、子どもに対して、「英語で何と言うんだらうね」と問いかけることはあっても、意図的にはやっていないとしている。

設問9では、日常生活場面で、園児に対して英語を使用したかどうかをその理由・動機とともに尋ねた。

A: 子どもが帰るとき、See you!と言ったので、それに、See you!と応えた。Stand up! と指示をした。挨拶をした。
B: Stand up! Sit down! 子どもからの話しかけ (Good morning!) には、英語で応えた。意図的に話しかけは行わなかった。やらなくても子どもから英語が出てくる。

両名とも子どもからの英語での話しかけに対して、英語で応えている。また、指示を英語で行っている。前出同様に、Aでは、英語を定着させたいという意図があったが、Bは、意図的には行っていないというスタンスである。

設問10では、英語活動時に困ったことがあったかどうかを尋ねた。

A: 歌が始まってからピアノに向かうなど、戸惑うことがあった。どのように動いたら良いか分からず困ったことがある。
B: 活動が終わって先生が帰った後、子どもに聞かれても自分もしっかり聞いてなくて発音がわからない場合があり、指導できないことが困った。どこでピアノを弾くべきか、弾かない方が良いか迷うことがあった。発音不安。

ここでの発言は、準備段階でのコミュニケーション不足が原因と考えられる。幼稚園での実践であり、また教員2名がピアノの演奏に協力的であったのでCDなどではなく、生演奏で、筆者らも子どもたちも英語の歌を歌うことができた。教員への英語の発音指導は事前も事後も全く行わなかったが、今後同様の活動が保育に取り入れられる場合は、考慮すべき問題の1つであろう。

設問11では、英語活動を行う際の必要な支援は何かを尋ねた。

A: 副担任がいるので、人数的にはさらなる支援は不必要。自身の英語の勉強に支援がほしかった。
B: 教師に対する発音指導の支援があれば良かった。英語の先生がいないときに、幼稚園の教諭に何が出来るか教えてほしかった。英語担当教員との事前のコミュニケーション。

教員は、英語活動実践場面での支援ではなく、教員自身の英語学習に対する支援が必要と考えていることが判明した。

設問12では、英語活動の中での担任の役割について

の考えを尋ねた。

A: 歌の伴奏、園児への支援、事後の保育への活動の取り込み。子どもに英語に触れさせる機会を与えているという役割。
B: 活動は英語の先生に任せる。

Aは、子どもを英語に触れさせる機会を与えるのは、教員自身の役割と認識している。Bは、英語活動を主として行うものではないという認識を持っているようである。しかし、Bも設問3への回答から、やはり子どもが英語に触れる環境を与えるのは教員の役割と認識していることがわかる。

2.1.2 第2部の調査結果と分析

中には、各設問に対しての答えとなる該当する情報部分を引用して、記述してある。

設問1では、活動前後の園児の変化について尋ねた。

A: 園にある英語の絵本を自ら出してみるようになった。/ 家にある英語の本を持って来る子が出てきた(2名)。/ 英語を習っている子が自信を持つようになった。/ 自分の名札(ローマ字表記)がほとんどの子がわかるようになった。/ 馬の鳴き声を英語で何とつかと聞いた子どもがいる。
B: 園外保育の際、(公園内のモニュメントに)英語が書いてあることに気付き数人集まっていた。/ どの文字を知っているか等という別の調査のとき、サッカーの中で、「この文字見た」と言う子がいた。

教員の観察から、子どもに明らかに変化が出てきていることがわかる。特に、アルファベットという文字に興味を持ち、園外保育の際に英語の書いてあるモニュメントに子どもが集まってという例のように、子どもの具体的な行動に結びついている。また、ほとんどの子どもが自分の名前の表記と他の子の表記が認識できるようになったという変化が見られた。

設問2では、園児が自発的に英語を使った活動をしているかどうかを尋ねた。

A: 帰りに、See you!と言う。/ プリントを渡したら、Thank you!と応える。
B: セブン・ステップは子どもが2人集まって、勝手にやっていた。縄跳びのときに、勝手に子どもが英語で数えていた。

教員の回答から、子どもが自発的に英語を口から出していることがわかる。数を数えるとき、10までは英語で、その後は日本語だったとのこと。Bは、「名札もわからなかったような子が英語で数を数えている」ことで、子どもの学びを肯定的に確認していると言える。

設問3では、園児が英語に関連した質問をするかどうかを尋ねた。

A: ない
B: 星座は何と言うの?

Aには、筆者が「お腹がすいたのは英語で何と言うかなどの質問がありますか」と尋ねたが、「ない」という回答だった。Bからは、1例が返ってきた。

設問4では、英語の歌と日本語の歌での園児の違いを尋ねた。

A：英語の歌は（中略）覚えやすい。日本語の歌は（中略）覚えるのに時間かかる。
B：子どもは、同じように歌ってくれている。

Aでは、英語の歌の方が覚えやすいということを述べているが、Bが「ちょうどよい長さの歌だった」と言うように、5歳児にも歌える英語の歌を選択するということが、また比較的よく知られている歌を選択するということが筆者らが心がけていたためであろう。Bでは、子どもは英語でも日本語でも同じように歌っていると判断しているが、自らは日本語の歌の方が気持ちを込めて歌える、英語では感情表現ができず自信がないと述べている。

設問5では、英語活動の影響で特に大きな変化のあった園児がいたかどうかを尋ねた。

A：1学期には活発でなかった園児が、自信ができて、積極的に話すようになった。
B：（活動前）反応の遅い子がいた。（活動が始まってから）11月12月頃気付いたが、英語と聞き嬉しそうで、反応も速かった。/園外で英語を習っている子がいたが、反応が遅く戸惑っている子がいた。

Aの回答からは、幼稚園での英語活動が良い影響を与えたので、以前より積極的に話せるようになった園児がいることがわかる。Bの回答からも、英語活動がきっかけで、反応が早くなった子がいることがわかる。しかし、園での英語活動では自然な遊びの中で英語を聞かせて、歌を歌い、体を動かす活動だったので、園外で習った英語の知識は直接は役に立たず戸惑っていた子どもがいたことが明らかになった。

2.1.3 第3部の結果と分析

中には、各設問に対しての答えとなる該当する情報部分を引用して、記述してある。

設問1では、保護者から英語活動について質問があったかどうか等を尋ねた。

A：子どもが英語活動を楽しみにしていると言ってもらったことがあった。/「今日は英語活動がありました」と言うのと、「どんな歌を歌ったか」と聞かれたことがある。
B：アンケート調査以前に、「英語はうれしい」と担任に言っていた保護者が複数いた。/下の子も入園するというので、期待している保護者が来年もあるかどうかを聞いてきた。/「月1回だけなんですか」（と聞かれた）。

教員との会話でも保護者から子どもが英語活動を楽しみにしていることが話題となり、保護者の関心の高さが

伺われる。B自身、「保護者は関心がすごくある」と述べている。

設問2では、保護者のアンケート結果を見たかどうか等を尋ねた。

A：保護者は幼稚園での英語活動への関心が高く、期待があることがわかった。/想像していた以上に園外で英語を習わせていることがわかってびっくりした。/「英語の発音が正しくないものを子どもが覚えてしまった」という記述から、園では発音に気をつけて教えないといけないと思う。
B：保護者の反応は薄いのかと思った。

両名とも保護者のアンケートの内容は見ているが、ここからの反応は異なっていると言える。Bのクラスの保護者もAクラスの保護者同様に、英語活動への期待を記入しているのだが、B自身は保護者の反応を「薄い」と評価している。筆者は、このことについてより深く質問していないため文字通りのこと以上の意味は不明である。設問3では、自由に発言をしてもらった。

A：初めのクラスでうまくいかないかと教授者が判断した場合、すぐに次のクラスでは改善された活動内容に変わっているのはすごいと思う。/本物が聞いてよかった。/附属だからこと大学教員に来てもらえての指導が受けられて良かった。B：子どもにとって、知っていることと知らないことは大きな違いであることがわかった。/英語で話しかけて、もし子どもが応えられなければ、どうして言えないのだという態度をとったかもしれないが、現実はそのようなことをせず、英語を押し付けなかったことがかえって良かった。子どもから自然に話してくれたから。/20分だけでは、ダメ。やりっぱなしではダメ。担任は頑張りたくないといけない。/英語の本も子どもが見ている。環境を整えるのは先生の仕事だ。

Aが述べているように、初めのクラスで活動が計画通りに行かない場合があった、次のクラスへの移動中、歩きながら寺尾と高橋は活動内容の変更を協議した。それも子どもたちが近くにいるので英語を用いて行った。同じ5歳児のクラスではあるが、構成員が異なるとクラスとしての性格も異なっていて同じ活動が同じように機能しなかったのである。Bは他の設問に対しても応えているが、教員は子どもが英語に触れる環境を整える責任があることを強く自覚していることがわかる。

2.2 幼稚園教員の学び

外国語・外国語学習について、我々は特定の考え・信念を持ち、その考え・信念が学習方法にも影響を与えることが主張されている(Horwitz, 1985, 1986; Kern, 1995; Wenden, 1999T)。あることについての特定の考え・信念はそれほど我々の行動に影響を与えるものであると言える。たとえ保育の一環としてでも、幼稚園で5歳児に英語という外国語に触れさせることは園児にとっ

てどのような意味を持つのかに対する教員の考えも様々であろう。

本研究では、母語である日本語が習得途中の子どもが英語に触れることは積極的には薦められないという考え・信念を持っていた1人の教員Bが、半年間の計6回の英語活動に園児とともに参加した結果、園児の学びのありのままの姿を見ることにより、インタビューをした時点では、「今は、英語活動を幼稚園ですることは良いことだ、必要と思うようになった」と自らの考えが変わったことを述べるにいたっている。もともと海外旅行に興味を持ち、英語のビデオを視聴していたが、英語の発音には自信がなく、英語の歌を歌うよりも日本語の方が感情移入ができると考えている教員であるが、自らが意図的に英語を子どもに話させようとは全くしなかったにもかかわらず、子どもが自然に英語を口に出す様子を見て、教員は思い込みで判断すべきでないことを学んでいるのである。実際、保育中に、自然な流れの中で既に行ったことについて、「英語で何というんだろうね」と子どもに話しかけたりするように変化している。子どもからの英語での話しかけには自らも英語で返している。英語活動は英語の先生に任せるべきだという考えはあるが、担任が子どもの学ぶ環境を整える責任があることを強く自覚するに至っている。

ベテランのA教員は、英語活動開始前、自分は「補助者であれば良い」と考え、積極的にかかわる態度ではなかったが、10月には、園児に質問されると困るからと、『英語の挨拶の本』を購入したりしている。また、保育の中に積極的に英語の歌、遊びを取り入れるようになっていることがわかる。自らも英語学習への興味を持つようになっている。

2.3 幼稚園教員から見た園児の学び

英語活動を実施することによって、園児には明らかに変化が出てきたことが教員へのインタビュー調査結果から判明した。英語に興味を持つようになり、自らが英語に関わっていく態度を身につけることができた園児が存在する。英語活動時の遊びの中で話した英語、歌った英語が、園での生活場面で自然に口に出てきている。

アルファベットを教え込むことは全く計画していなかったが、筆者らの必要上、園児たちには自らの名前を書いた名札を毎回首から下げてもらっていた。どれが自分の名札であるか、ほとんどの園児がわかるようになったとのことである。園児の文字への興味が増えたことは、園外保育の際にも明らかになっている。

園児は英語だから日本語だからと区別せずに遊びの中で用いられる歌を楽しみながら歌うことによって自然に身につけていく。保護者がおどろくほどの良い英語の発音もみにつけることができる。

3. 幼稚園における英語活動の意味

保護者の1人もアンケートに書いていたのだが、総ての保護者が子どもに園外で英語を習わすことができるわけではない。幼稚園での保育の一環として、それも遊びの中で英語に自然に触れる機会を園児が得た結果、英語に興味を持つようになり、新しいものを学ぼうという積極的な態度も身につけ、英語の歌も歌えるようになった。日本語以外の言語が世界にはあるのだということに気付くことができた子どももいる。英語によって父親との母親との家族以外の大人とのコミュニケーションが広がっている。幼稚園で英語活動が行われることは、子どもの成長にとっても良い経験ができると主張したい。

教員もまた、子どもの学ぶ能力、可能性を再確認することができる。英語活動によって、保育の内容が広がるのが主張できる。

筆者たちは、英語教育ではなく、あくまで幼稚園での保育の一環として遊びの中で自然に英語に触れてほしいと考え「英語活動」を計画した。小学校における英語活動実践でも、毎回20分しか時間を取らない学校もある中で、幼稚園児が20分の英語活動に集中できたことを筆者は高く評価し、園児の可能性に期待するところである。幼稚園での英語活動は、園児にとってさまざまな可能性を引き出すきっかけになりうると考える。

おわりに

筆者らが実践した幼稚園での英語活動によって、園児が英語に触れる経験を積んでも、園児は英語嫌いにはならず、将来小学校でまた英語に触れる機会が来たときには、「英語活動は楽しい」という気持ちで臨むことができるだろう。小学校での英語活動では、中学校の英語教育との連携を考え、「文字教育をするべきではないのか、した方が良いのか」が問題になることもある。幼稚園での実践からは、「子どもはアルファベットに興味を持つようになる」、「教えなくとも文字認識ができるようになる」と主張できる。したがって、「絶対に教えるべきではない」と考えるのではなく、子どもの興味をうまく誘導してやり、アルファベット故に英語が嫌いだという生徒を作らないことは気をつけるべきだと考える。

園外で英語を特別に学んでいる子どもすべてが、幼稚園での英語活動時により良くわかり、より良く反応できたわけではない。英語活動のおかげで、積極性が身につけられた子どもが存在する一方、自分では既に英語を習っているのに幼稚園での英語活動では、素早く反応できなくて戸惑っていた子どもがいたことも判明した。その子は、家では英語を書いたりしていたそうである。そのような子どもにも、英語を良く聞いて身体を動かす楽しさを大人がよりそって体験させてあげたいと思う。

複数の研究者で細心の注意を持って質問紙を作成し、

確認をしたつもりであったが、応えにくい設問があったことは反省点である。また、インタビューでも、より正確な、より深い情報が聞き出せるような質問の仕方があったかもしれないが、この点は、20の設問を作成し、インタビュー調査を行った第1筆者に総ての責任があることを記しておく。

参考文献

- Horwitz, E. (1987). Surveying Student Beliefs about Language Learning. In A. L. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*. (pp.119-129). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Horwitz, E. K. (1999). Cultural and situational influences on foreign language learners' beliefs about language learning:a review of BALLI studies. *System* 27(4) 557-576.
- Kern, R. G. (1995). Students' and teachers' beliefs about language learning. *Foreign Language Annals*, 28, 71-91.
- Oxford, R. G. (1995). *Language Learning Strategies: What every teacher should know*. Boston, MA: Heinle.
- Terao, Y., Suzuki, M., Takahashi, M., Nasukawa, T., & Taniishi, H. (2007). English activity as a project at the kindergarten of Hyogo University of Teacher Education. *The Journal of Teacher Education*, 19, 97-107.
- The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2009). 小学校学習指導要領・第4章 外国語教育
http://www.mext.go.jp/a_menu/scotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm (2009年8月31日入手)
- The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2009). 学校基本調査・平成20年度 学校基本調査速報 調査結果の要旨
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/002.htm (2009年8月31日入手)
- Wenden, A. L. (1999). An introduction to metacognitive knowledge and beliefs in language learning: beyond the basics. *System*, 27, 435-441.

(2009.9.1受稿, 2009.11.19受理)

付録 A:「英語で遊ぼう」のアンケート

1. 回答して下さった方 ①父親 ②母親 ③その他()
2. お子様の性別 ①男児 ②女児
3. お子様は、今までに英語を学んだことはありますか? ①ある ②ない
あるとしたら、具体的に、どこで、どのような様子であったかをご記入下さい。
4. 保護者の方は、「子どもの英語教育」に興味がありますか?
①非常にある ②ある ③どちらともいえない ④あまりない ⑤全くない
5. 幼稚園で英語活動を行うことに賛成ですか、反対ですか?
①賛成 ②やや賛成 ③どちらともいえない ④やや反対 ⑤反対
また、その理由を聞かせてください。
6. お子様は英語に興味があると思いますか?
①非常にある ②ある ③どちらともいえない ④あまりない ⑤全くない
7. 幼稚園で英語活動を実施してから、お子様の英語に対する様子は変わりましたか?
①非常に変わった ②変わった ③どちらともいえない ④あまり変わらない ⑤以前と同じ
どのように変わりましたか?
8. お子様は幼稚園の英語活動について、保護者の方にどのように話していますか?
①英語が大好き ②好き ③どちらでもない ④嫌い ⑤英語が大嫌い
また、お子様の話す内容を聞かせてください。
9. お子様は家庭で英語を使って話すことがありますか?
①非常にある ②ある ③どちらともいえない ④あまりない ⑤全くない
またあるとしたら、それはどんな時に、どのような様子ですか?
10. お子様は家庭で英語の歌を歌うことがありますか?
①非常にある ②ある ③どちらともいえない ④あまりない ⑤全くない
またあるとしたら、それはどんなときに、どのような歌ですか?
11. 英語に関して幼稚園へのご意見をお聞かせ下さい。

付録 B: 教員への質問

- (I) ご自身について
 - (1) 幼稚園での保育はこうあるべきだという信念、信条があれば教えてください。
 - (2) 幼稚園での英語活動について、始める前はどのように考えて(感じて)いましたか。
 - (3) この半年で、考えが変わったと思いますか、変わったならどのように変わったのでしょうか。幼稚園での英語活動についての今の考えを教えてください。
 - (4) 活動前、英語および英語学習についての特定の考え・信念を持っていましたか、あれば、教えてください。
 - (5) 英語活動開始前、ご自身は英語にどのような興味・関心がありましたか、具体的に英語に関連してどのようなことをしていましたか、あれば教えてください。
 - (6) ご自身の英語についての興味に変化がありましたか、この半年で何か英語に関する新しいことを始めましたか、あるいは、英語に対する態度が変わりましたか。
 - (7) 英語活動を始める前と始めた後では、ご自身のなさる幼稚園での保育内容にどのような変化がありますか。
 - (8) 日常の保育に英語をどのように活用されましたか、あるいはされませんでしたか。
 - (9) 日常生活場面、園児に英語を使ったことがありましたか、あれば、それはどんな時ですか、園児からの要請ですか、ご自身からというのであれば、その動機は何ですか。
 - (10) 英語活動を行うとき、何か困ったことがありましたか、それは何ですか。
 - (11) 英語活動を行うとき、どのような支援があったら良かったですか。
 - (12) 英語活動中でのご自身の役割についてどのようにお考えですか。(もっと積極的に関わりたいですか。)
- (II) 園児について
 - (1) 活動を始める前と始めてからで、園児に変化がありましたか、「音声、歌、発話、文字など英語に関すること」で変化がありましたか。
 - (2) 先生からの働きかけがないにもかかわらず、園児が英語を使った活動をしていることがありますか、それは、どんなときにどのようなものですか。
 - (3) 園児が英語に関連した質問をすることがありますか、それは何ですか。
 - (4) 日本語の歌を歌うときと、英語の歌を歌うときに園児に違いはありましたか、あれば、どのような違いが教えてください。
 - (5) 英語活動を始めたことによってほかの園児と比べて何か大きな変化があった園児がいますか、それはどのような変化ですか。
- (III) その他
 - (1) 保護者から園児の英語活動について何か質問されたりしたことがありますか、それはどんなことですか。
 - (2) 保護者のアンケート結果を見ましたか、それを見てどのようにお感じになりましたか。
 - (3) 何かおっしゃりたいことがあれば、何でもご自由にご発言ください。